

(2)仲間の合流

飯豊山(56)

岡崎信用金庫の仲間との登山が続いていた一方で日銀の同期生とも登るようになり、いつの間にか一緒に歩くことになった。

飯豊山の山小屋には寝具も食事もないので、これらを背負うと荷物は重くなるし、縦走形式なので全行程を背負わなければならない。特に出だしの大日杉小屋からの登りがきつかった。切合（きりあわせ）小屋までの6時間は真夏の太陽に照りつけられて、3.5ℓの水を飲んだ。これが汗となって噴き出し靴の中までぐっしょり。切合小屋からさらに2時間稜線を歩いてこの日の宿、本山（ほんざん）小屋にようやく辿りについた。精も魂も使い果たした。今思い出してもよく老体が持ちこたえてくれたと思う。

飯豊山は稜線まで登ってしまえば天空の楽園という雰囲気だが、そこまでの約1000mの間が登るにしろ下るにしろきついことを、身をもって体験した。

山中2日目は梅花皮（かいらぎ）小屋まで。この間は海拔2000mのお花畑。ガスがかかっていたうえにそよ風が吹いていて、前日とはまるで違うさわやかな稜線歩きだった。

途中、御西岳から飯豊連峰の最高峰・大日岳に4時間かけて往復するのが一般的なのだが、前日の稼働率120%の直後なので小生はパスさせてもらった。

山中3日目、梅花皮小屋から飯豊山荘まで標高差1500mを下ったが、この道がまた岩とむき出しの木の根でできた急坂。五体満足で飯豊山荘のお湯につかった時はわが足に「ご苦労様でした」と言ってやった。

朝日岳(57)

飯豊連峰縦走の翌年は、朝日連峰の縦走に挑戦した。この二つの山を登れば東北地方の百名山の難関は終わり、全体としても目途がつくと考えていた。

鶴岡から泡滝ダムまでタクシーを使うと約3時間のアルバイトで大鳥池まで入れてしまう。飯豊の時と同様寝袋と食糧持参であるが、雲泥の差である。

2日目は以東岳を尾根筋から登った。朝日連峰の中で大朝日岳は天空につきあげる見事なピラミッドであり、まさに盟主である。しかし、以東岳のどっしり構えた大きさは百名山に入っても決しておかしくない山である。

その以東岳に登ってしまうとあとは優雅な稜線歩きが続くが、この日の宿の竜門小屋になかなか着かない。歩きくたびれてしまった。

3日目は、大朝日岳、小朝日岳を越えて古寺鉱泉に下りて一泊。さっぱりした身体で東京に戻った。

なお、大鳥池を出発して間もなく、以東岳に向かう登山道で、トップが蜂の

群れに襲われた。その時の痛みもさることながら後遺症も残ってしまったそうだ。蜂の巣のあり場所は予測がつかないだけに注意しようにも限界がある。小生はラストを歩いていたので難を逃れた。お気の毒としか言いようがない。

空木岳(58)

中央アルプスでも、宝剣や木曾駒には何度も登っているが、空木（うつぎ）岳は縁が薄かった。空木岳に行くには宝剣から縦走するか、駒ヶ根から標高差2000mを登らなければならない。この二者択一を迫られ、小生としては縦走の方を選択して仲間を探していた。

東京に住んでいると、中央アルプスは伊那側から登るものと決め付けていたが、岡崎の山仲間から木曾側から入るなら案内しても良い、と耳よりの提案があった。この提案にすぐに乗った。

登山計画は、木曾の伊奈川ダムから日本300名山の越百（こすも）岳に登り、200名山の南駒ヶ岳を経て100名山の空木岳まで縦走する。下りは木曾殿山荘から下りて、マイカーを置いた伊奈川ダムに戻るというもの。山中2泊3日である。

山中第1泊目の越百小屋にはほかの山小屋にはない珍しいルールがある。宿泊の予約の時「必ず着替えを持ってくること」としつこく言われた。その理由は、この小屋は着替え・荷物のための棟と食事・寝室棟が分かれています、山小屋に着くと汗臭い服は脱いで荷物棟に置き、さっぱりした格好で食事をして寝てください、ということ。寝室は狭くてザックの置き場がないし、寝具は寝袋なので寝袋を汗臭くしないためのルールなのである。それなりに納得した。

第2泊目の木曾殿山荘でも珍しい経験をした。ここの管理人は脱サラご夫妻とのことで他の山小屋に比べ、気遣いがすごい。例えば、小雨の中で着いた我々に対して「雨に当たったでしょう。着替えのズボンはありますか」と聞かれた。こんな会話は初めてだ。

この山行では、もう一つ書いておきたいことがある。古い地図には気をつける、ということ。山のかたちも登山道も変わりやしないから、地図は多少古くてもかまわないと思って14年に14年前の地図を持って行った。この古い地図では、越百岳の水場は小屋の手前1時間の地点と小屋に常水の記号がついていた。小生はこれを信じて翌日の水は小屋で用意することにして、小屋の手前では補給しなかった。ところが小屋に水場はなかった。地図の所要時間も大きく修正されていた。昔の地図を使う時には注意が必要である。

常念岳(59)

日本アルプスを世界に紹介したウェストンが常念岳について「松本付近から

仰ぐすべての峰の中で、常念岳の優雅な三角形ほど、見る者に印象を与えるものはない」と書いている、と深田久弥は紹介している。

ウェストンや深田久弥と同様、小生も松本から見えるピラミッド型の常念とその左にほんの少しだけ見える槍ヶ岳には大きな感銘を受ける。列車が松本駅に近づくと、家並の間から常念が見えるのではないかと左手の窓にくぎ付けになってしまう。

この常念岳には 16 年に燕岳から大天井岳まで縦走してから登った。これが初登頂だった。高校 1 年の夏に燕岳から表銀座を目指した時は燕岳まで 2 日かかったが、今回は東京を出発した日に燕山荘に着いてしまい、まだ時間に余裕があるので燕岳をゆっくり往復出来た。世の中便利になったものだ。

表銀座からの眺望は、穂高から白馬まで全部が一望にもとに見晴らせる見事なものだった。当初の計画を、低気圧が通り過ぎるまで 2 日間延期したのが功を奏した。

おまけに常念小屋では夕方にブロッケン現象が現れ我々を歓迎してくれた。

3 日目念願の常念の登りにかかると、残念ながら無情の雨が降り出し雨具を着ざるを得なかった。頂上に立つ頃には雨に加え風も吹き出し、蝶ヶ岳を越えるまで吹き荒れていた。

平ヶ岳(60)

平ヶ岳について深田久弥は「百名山を志した最初から私の念頭にあった」と書いている。その理由は、利根川流域の最高峰で、頂上は長く平らで个性的であり、人里から最も遠いからだと言っている。この評価はまだ平ヶ岳に道のない時代の話であるが基本的には今でも変わらない。

平ヶ岳のオーソドックな登山ルートは、清四郎小屋近くの鷹巣登山口から尾根伝いに登る。急坂は少なく、草原と湿原の中を延々と登ると説明されている。秋には紅葉が見事だそう。しかし、このルートの問題は時間がかかることだ。朝日新聞が標高差と水平距離から計算すると 10 時間。ガイドブックでは 12 時間と書いてある。いずれにしても日照時間が短くなっている秋に 70 歳を過ぎた老人が歩くには問題である。

結局、今回は安全に平ヶ岳に登頂することが第一義と考え、最近開発された中ノ岐ルートを使うことにした。このルートは銀山平の旅館に泊まると、翌日マイクロバスで中ノ岐登山口まで運んでくれる。

ここからは登り 4 時間で頂上に着いた。頂上部は広くて平らな湿原で、標識がないと何処が頂上だかわからない。下りは 3 時間でマイクロバスの待つ中ノ岐登山口に下りてしまった。

何か裏口登山をしたような後ろめたさが残った山行だった。

皇海山(61)

皇海山は非常に難しい山と書かれることがあるが、これは昔栃木県足尾から庚申教の庚申山等を越えて登っていた頃の話である。あるいは、現在群馬県の沼田からのルートができたが、この林道が狭い砂利道、ガードレールも不十分なため、床高の四輪駆動車でないと危なくて入れないから難しい山とされているのかもしれない。

我々はネットで、皇海橋までマイクロバスで送迎してくれるペンションを見つけた。片品のペンションに前日泊まって、翌朝 6 時半に出発して栗原川林道をひたすら走る。この林道は何のために造ったか知らないが、未整備のまま残されている。道路は悪くても自分で運転するわけではないから、うつらうつらさせてもらった。

8 時には皇海橋から歩き始めることができたので、10 時には頂上に着いてしまった。頂上は樹木が茂っているうえ、ガスに包まれていたので見晴らしはきかない。そのうえ団体客が着いたので我々は早々に下り始めた。

このままバスに直行すると時間が余りすぎるので、鋸山に登ってくることにした。地図では往復 1 時間 10 分と書いてあったが、登り始めると岩山で時間がかかる。往復 2 時間もかかってしまった。最後はバスの時間を気にしながら懸命に下りた。

同じバスで来たカップルは、鋸岳で時間を食われたと集合時間に 30 分も遅れて戻ってきた。先着していた我々は彼らを無言で迎えた。

魚沼駒ヶ岳(62)

昨 2016 年は雨にたたられたが、17 年も雨の日が続いた。魚沼駒ヶ岳登山も当初 7 月の初めを予定していたが出発の前日、現地から「雨がひどく、とても登山は無理」との電話が入った。

当初計画を 2 週間延期して出掛けたが、麓の银山平を出る時も雨。この日は 6 時間ほど登って駒ノ小屋に行くだけだから小雨なら歩けると読んでいた。ところがいざ歩き始めると、雨はどんどん強くなる。雷も落ち始めたので明神神社の祠で雨宿りしたがいっこうに雨、雷ともに収まる気配がない。やむなく登山を断念して宿に引き返した。

当初計画では、枝折峠から 1 泊 2 日で魚沼駒ヶ岳に登る予定だったが、初日が雨でつぶれたので、ピストンで登ることにした。所要時間は往復 10~11 時間と読んだ。

夜が明けると雨は上がり、雨の心配はなさそう。すぐ南にある単独峰の荒沢岳が魚沼駒とほとんど同じ高さなので、自分たちの立ち位置が良くわかった。

頂上直下には、大きな雪渓が広がっており、7月中旬の標高 2000m の山としては残雪が多い。さすがに豪雪地帯の山である。

この日は長丁場なので頂上での休憩も早々に切り上げて下山を始めた。帰路は、上り下りをくり返しながらの下りで予想外に体力を消耗したが、何とか 10 時間で往復出来た。

1 日 10 時間という行程は、結果的にはできたものの、相当にきつい。当初から計画に盛り込むのは避けた方が良さそうだ。事故を起こしたら「いい年をして、それ見たことか」と非難されることは火を見るより明らかだ。

(3) 韓国人の山仲間

穂高岳(63)

常勤をリタイアして東京に戻ってから、古い友人との交遊が復活した。その中に新聞業界の友人がいて「韓国の新聞社の東京支局長が日本の山に登りたがっている。会って見ないか」という話があった。会ってみると 40 がらみのナイスガイ。かなり日本語が通じ東京近郊の山をいくつか案内した。

そのうちに、富士山には登ったからこれに次ぐビッグネームの山に連れて行ってくれという。ただし部下のいない東京支局長なので日程はぎりぎりまで絞ってくれとの条件が付いた。

思案の末、穂高に案内することにした。計画としては、金曜日の夕方東京を発って松本に 1 泊。2 日目は涸沢泊。3 日目に北穂から奥穂まで歩いて涸沢に下山。4 日目に東京に戻る。

彼は、あずき号に乗って早々パソコンを開いた。ソウルの本社から「山に行くことはかまわないが、常に連絡が取れるようにしておけ」と言われたという。韓国ではどこからでもネットにつながられる。日本だって何処にいてもネットが使えると思ってパソコンを持ってきたという。パソコンは大事に梱包してザックにしまってもらった。

韓国では兵役の義務があるが。彼はこの義務を米軍に出向する形で果たしたので英語はできるし、体力は抜群で涸沢への登りもすいすい。しかし、思い通りにはならないのが天気。3 日目、北穂に登ろうと思ったら秋の冷たい雨が降っていた。北穂の南稜も怖い。北穂から奥穂までの稜線歩きは危険だ。しかしこのまま東京に戻るわけにもいかない。奥穂だけに登ることにした。

ザイテングラードを登っていると、高年のご婦人が濡れた岩で足を滑らせて転倒し、額をけがしてしまった現場に出合わせた。我々は一層気を引き締めて、土砂降りの雨の中、奥穂の頂上にたどり着いた。体力のある彼は雨もそれほど気にしていない様子。日本第 3 の山に登れた喜びをかみしめていた。

帰りは北穂をカットした分、余裕があったので横尾まで下って泊まった。上

高地までの道のりも、天気は回復し余裕しゃくしゃくの散歩。彼のおしゃべりに付き合った。例えば「米国人と喧嘩をする時には、米国人は顔を殴ることしか知らないから、脚を狙え」。「日本の山の名前は殆ど『岳』か『山』がついている。どう使い分けるのか。『岳』はタケ、ダケなど、『山』はヤマ、サン、セン等をどう使い分けるのか」頻りに質問してくるが、答えに詰まってしまった。

後日、第3の高峰が終わったから第2の高峰・北岳にも登りたいと言い出した。ただし、時間の余裕がないので夜行日帰りのスタイルとの条件が付いた。これでは北岳はとても無理なので北岳が良く見える仙丈岳に案内することにした。

東京を金曜日の仕事が終わってから小生の車で中央高速を伊奈まで走り、北沢峠行きのバスの停留所の近くに駐車して車中泊。翌日朝一番のバスで北沢峠に上がって、仙丈岳をピストンで登ってそのまま東京に帰った。まさに昔の夜行日帰りのスタイルだった。北岳が良く見えただけに、彼は北岳に登れなかった悔しさを吐露していた。小生は「また日本に登りに来いよ」と慰めるだけだった。

御嶽の大噴火があった時には、真っ先に安否を気遣う電話をかけてきた。気の良い友達である。

槍ヶ岳(64)

韓国の新聞社の東京支局長から韓国のエリート官僚を紹介された。日本流に言えば厚生労働省の企画官というところ。日本には政策研究大学院大学の研究員として来ているという。この官僚も富士山には登ったからそれに次ぐビッグネームに登りたいという。新聞社の支局長が穂高だったので、槍ヶ岳に案内することにした。ただ、彼は日本語はたどたどしいので、小生は英会話の勉強と思って、2日間英語での山登りになった。

登山計画は、新宿発7時のスーパーあずさで松本、上高地を經由、槍沢ロッヂに泊まる。2日目は槍ヶ岳に登って槍ヶ岳山荘泊。3日目には下山することにした。

槍沢ロッヂは、北アルプスの山小屋としてはややシャビー。彼がどう反応するか心配だったが、文句も言わずに泊まってくれた。

槍沢の登り、槍の穂先の岩も難なくクリアー。昼食に彼は日本にいながら韓国のインスタントラーメンを食べていたのでその理由を聞いたら、韓国製の方が食べ慣れているからと言っていたのでひとまず安心した。時間的に余裕があったので、槍沢まで下りてロッヂに連泊した。

上高地までの道すがら、いろいろな話題が出たが、彼は富士山の頂上でのご来光に感動したようで、御利益は何かを聞いてきた。日の出には人間を元気に

するパワーがある。そのパワーは頂上と例えば五合目では変わらないが、本人の受け止め方は違う。他のことでも人によって受け止め方が違ってしまふことが多い。こんなことを議論していた。

また、韓国に帰っても山に登りたいので山靴を買いたい。どこのメーカーが良いか、と聞かれたので、靴のメーカーによって一長一短。信頼のできる山の道具屋の店主に相談すれば、最も適した靴を見つけてくれる。こう答えると、それではその信頼できる店主のいる店に連れて行ってくれという。槍ヶ岳からの帰り、ザックを背負ったまま小生の行きつけの山の道具屋に連れて行ったらその場で靴を一足買っていた。

彼は韓国に帰国してから、日本での研究成果を 600 ページもある分厚い本にまとめた。この本は勿論ハンゲルで書かれていたが、その巻頭言の中に「山田英暉」の文字を見つけたので、この部分を訳してもらったら「山歩きを一緒にしながら世を生きる知恵を教えてくれた山田英暉さんに感謝申し上げます」と書かれていた。小生の名前が韓国の学術書に載っているなんて光栄である。